



Title	賛助会員募集のお願い／『モンゴル研究』投稿規程・執筆要領／編集後記
Author(s)	
Citation	モンゴル研究. 2007, 24, p. 68-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102335
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

賛助会員募集のお願い

『モンゴル研究』は1975年の2月に創刊されたモンゴル研究のための研究誌です。僅か101頁のタイプ孔版印刷から始まった小誌は、毎号着実な実績を積み上げ、いまでは内外の研究者を中心に、広範な支持と高い評価を得ています。

1984年からは、賛助会員制度が発足し、創刊当時からお世話になった故司馬遼太郎さんをはじめ、多くの方々から、暖かいご支援を頂戴して参りました。

今後とも、『モンゴル研究』の在り方にご賛同いただき、ひとりでも多くの方が賛助会員となつていただけますよう心から希望いたしております。

尚、賛助会員についての要綱は以下の通りです。

モンゴル研究会賛助会員要綱

- 賛助会員とはモンゴル研究会の趣旨およびこれまでの研究会活動とのその意義に賛同し、会の活動、運営には直接参加せず、その周囲にあって、この会を育てていこうという善意から財政的に支援する個人、または団体である。
- 賛助会員は賛助会費（年間1口5,000円、何口でも可）を定期的に納入することで財政支援を行い、『モンゴル研究』の贈呈を受ける。
- 賛助会員は、モンゴル研究会の趣旨や活動に異議がある場合、あるいは個人的な理由によって、いつでも自由に退会できる。

既に賛助会員となって下さっている皆様、ご支援、誠にありがとうございます。ご支援いただいたすべての方々のお名前をここに掲げて、御礼を申しあげるべきところですが、個人情報保護の観点から、賛助会員名簿掲載は控えさせていただいております。何卒、ご理解下さい。

また、会員、賛助会員の皆様の個人情報管理につきましては、法令を遵守し、今後とも、十分な注意を払ってまいります。

『モンゴル研究』投稿規程・執筆要領

＜投稿規程＞

1. 名称及び発行

本編を『モンゴル研究』(JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES) と称し、原則として毎年1回発行する。

2. 投稿資格

投稿できる者は、原則として、モンゴル研究会会員に限る。ただし、次のいずれかに該当する場合には投稿を認めることがある。

- (1) モンゴル研究会の依頼により、モンゴル研究会で講演、発表等を行った非会員。
- (2) その他、会員の推薦があって、編集委員会が適当と認めた者。

3. 投稿内容

モンゴル研究に関する未発表原稿で、原則として研究会の月例会などで報告したもの。その種類は論文、研究ノート、調査報告、翻訳などで、編集委員会が適当と認めたもの。

4. 原稿の分量及び様式

(1) 原則として、原則として、論文は50枚以内(400字詰め原稿用紙換算、図表や注を含む)、研究ノート30枚以内(同)。その他の原稿も50枚を超えない。制限を超える長文原稿は、編集委員会の承認によって受理または分割連載されることがある。欧文・モンゴル文の場合も、これに準じる。

(2) 原稿の様式や提出方法については、別掲の執筆要領に準じる。

5. 原稿の締め切り

投稿を希望する者は原則として、12月末日までに編集長にその旨を申し出、原稿の締め切りは原則として、5月末日とする。査読による修正の再提出期限は編集委員会が定める。

6. 原稿の提出

- (1) 完成した原稿1部と電子ファイルを編集長へ提出する。
- (2) 原稿はワープロで作成し、フロッピーディスク等を添えて提出する。

7. 論文等の審査及び掲載の可否

- (1) 編集委員会は、審査の結果、必要ならば原稿の修正を求めることができる。
- (2) 編集委員会は、審査の結果等に基づいて掲載の可否を決定する。

8. 校正

校正は執筆者の責任において行い、原則として再校までとする。

9. 掲載及び別刷りの経費

- (1) 掲載に要する経費は原則として無料とする。
- (2) 別刷りを希望するものは編集長にその旨を、必要部数ともに申し出る。別刷りの費用は希望者が負担する。
- (3) 執筆者には掲載号を1部進呈する。

10. 出版権利用の許諾

投稿者は、モンゴル研究会に対し、当該論文に関する出版権の利用につき許諾するものとする。

11. 論文等の電子化及びコンピュータ・ネットワーク上の公開

- (1) 論文等は、電子化し、ホームページ等を通じてコンピュータ・ネットワーク上に公開することができる。
- (2) ただし、執筆者が電子化・公開を希望しない特別の理由を有する場合は、編集委員会に申し出て、当該論文の電子化・公開を拒否することができる。

＜執筆要領＞

1. 原稿について

- (1) 原稿用紙はA4を使用、1ページ=40字×40行とする。

(2) タイトルの後には執筆者名のみ記し、所属、肩書きなどは一切記入しない。但し海外からの投稿には、末尾に(内蒙古大学)などのような情報をふる場合もある。

(3) 原稿にはタイトルおよび執筆者名の英文表記を添える。

(4) 本文の形式

本文は横書きとする。特に希望のない場合は、章立ての形式を右の通りとする。

(5) 図表

図表を入れる場合は、図表のタイトルに通し番号(図1、表1等)を付ける。本文中での図表の位置を明示する。

(6) 訳・参考文献

1) 訳は文末註の形式とする。

2) 参考文献リストの書き方は原則として下記の通りとする。

①日本語文献

論文の場合

著者名(発行年)、『論文名』『掲載雑誌や本の名前』雑誌号数、発行所か出版社名

例) フフバートル(1999)、『『内蒙古』という概念の政治性』『ことばと社会』第1号、三元社

本の場合

著者名(発行年)、『本の名前』発行所か出版社名

例) 坂本是忠(1974)、『辺疆をめぐる中ソ関係史』アジア経済研究所

新聞の場合

『新聞名』(何年—何年)

例) 『朝日新聞』(1995—2001年)

②モンゴル語、ロシア語、英語など欧文文献の場合

論文の場合

著者名(発行年)、『論文名』『掲載雑誌や本の名前』掲載号数、発行所か出版社名

本の場合

著者名(発行年)、『本の名前』発行所か出版社名

例) П.Шагдалсүрэн(2000) “Миний мэдэх маршал Х.Чойбалсан Улаанбаатар

* [] でくくって翻訳する場合もある。

例) [シャグダルスレン(2000)、『私の知るチョイバルサン元師』ウランバートル]

新聞の場合

“新聞名”(何年—何年)

例) “ҮНЭН” [ウネン モンゴル人民革命党発行紙] (1945—1996年)

③中国語の場合

基本的に、日本語文献と同じ。

例) 張大宣(1583)、『外蒙古現代史』第4冊、蘭溪出版社、台湾

(7) 提出された原稿は返却しないものとする。

2. 原稿の提出

上記の原稿とともに、原稿のファイルをいれたCDまたはフロッピーディスクを提出する。文書ファイルと図表ファイルは別々のファイルにいれ、文書ファイルはテキスト形式(.txt)、リッチテキスト(.rtf)、あるいはワード(.doc)とし、図表ファイルは、原則エクセル(.xls)とする。その他の場合および、写真を画像ファイルで提出する場合は編集委員会と相談する。また、使用ソフトのバージョンも明記する。プリントアウトした図表の原稿を必ず添える。モンゴル語についてはモンゴル語が正しく打ち出された原稿、テキストファイルの他に、独自の入力方式による場合はモンゴル語フォントを明記し提出する。必要な場合、モンゴル語のフォントも送付する。

はじめに (序、序文など)
I
1. (1)
II
•
•
おわりに (結び、結論など)

編 集 後 記

◇日本の国技である相撲界で、東西両横綱にモンゴル人力士が揃い、その強さに圧倒されました。一方で、ケガの療養中に母国モンゴルでサッカーを興じた横綱・朝青龍を巡り「横綱の品格」が問われるできごとも。

◇さまざまな糺余曲折を尻目に、モンゴル語科卒仲間と「だって、モンゴル人だものねえ」の一言で結論付けようとしたのは、いささか軽率かもしれません、あながち的外れではないと思っています。むしろ、そう思えたことは、モンゴルを学んだことで、知らず知らずのうちに、私たちの中に異文化理解の基が築かれていたんだなあという実感に繋がりました。

◇知っていると、その分だけ、多様な局面からの見方ができる。些細な誤解や不理解から簡単に人を傷つけてしまっているように思える今の社会に、必要不可欠な要素なのではないかと感じさせられました。

◇今号は、いつもより投稿本数が少なく、冊子になるかどうかの検討から始まりましたが、仕上がってみると、過去、現在、未来を網羅し、さまざまな角度から積極的にモンゴルを紐解いた斬新な一冊に仕上がったと思います。それぞれの、「もっと知りたい」「もっと探りたい」という想いの結晶である本誌が、広く、手に取ってくださる方お1人お1人の異文化理解の助けになることを願いつつ。

◇なお、今号の編集に当たっては、新しく導入したソフトとの取組み合いで、いつもより手間とご苦労をおかけした吉本さんに、特にお礼を申し上げたい。

(山本裕子)